

サント・ドミンゴ教会跡資料館

この資料館は、ジャポネスク様式の立派な外観をした小学校の地下にあり、中に入るには、長崎歴史文化博物館へと続く脇道にある目立たない出入り口を通ります。少し分かりにくいところにありますが、考古学的に興味深い遺構が見られます。

ドミニコ会の宣教師たちはフィリピンのマニラから日本にやってきました。彼らは 1602 年に九州の西に位置する下甕島に最初のドミニコ会の教会を建てました。その後、1606 年にその教会を解体して九州本土の川内に移築しました。1609 年、彼らは再び教会を解体し、今度はここ長崎に移築しました。石の基礎の上に木材でつくられたこの教会は、最後に長崎に建てられた教会のひとつでした。1614 年のキリスト教禁教令によってすべての教会の取り壊しが命じられたため、ドミニコ会の創始者の名前にちなんでサント・ドミンゴと名づけられたこの教会はわずか 5 年間で役目を終えました。

サント・ドミンゴ教会の遺構は、1990 年代後半、小学校の建て替えの際に発見されました。校舎はこの資料館を下部に収容するよう設計されています。館内に巡らされた高架通路から最初に見えるのは、教会の地下室の遺構です。その向こうには、右側に排水溝がついたイベリア風の石畳があります。どちらも 17 世紀初期につくられたものです。

17 世紀、教会の跡地には 4 代にわたって長崎の代官を務めた末次家の屋敷がありました。その後、18 世紀後半から 19 世紀後半にかけて代官を務めた高木家の屋敷がこの場所に建てられました。通路の右側にある井戸は、高木家がここに住んでいた時代のものです。

通路の最後には小さな展示エリアがあります。特筆すべきは、花十字紋で飾られた教会の屋根瓦です。他のサント・ドミンゴ教会時代の遺物には、メダイ、十字架、指輪、ロザリオなどがあります。

長崎は 1663 年に大火災に見舞われました。展示品の中にはその火災で焼け焦げた皿や、熱で土色が灰色に変色した瓦なども含まれています。発掘調査では、中国の茶碗や急須、オランダのジンの瓶、グラス、皿などの日用品も出土しました。